

しっ 漆 き 器

全国的に有名な会津漆器は、伝統と新技術をふまえた産業として注目されています。会津漆器は木製漆器が中心で、ひとつの椀にも伝統の技を支える職人たちの心がこめられています。

1. 会津漆器の歴史

室町時代、会津の領主、芦名盛高あしな もりたかのころ、漆うるしの栽培や漆を塗った木の鉢ひらや椀わんがすでに作られていたと伝えられています。しかし、これが会津漆器の起こりかどうかが、はっきりしません。漆器



会津漆器の製品

が本格的に作られるようになったのは、天正18年てんしょう (1590) に蒲生氏郷がもうじょうが会津の領主になってからです。氏郷おうみは、近江ひのわんの日野椀ひのわんの作りかたを学ばせるために、木地師きじしや塗師ぬりしを会津に移住させました。江戸時代、保科正之ほしなまさゆきは、漆器産業をさかんにししましたが、その後、寛政年間 (1789~1800) に田中玄宰たなか げんざいが京都から人を招き、蒔絵まきゑの技術や金ぱく、金粉まきえの作りかたなどを学ばせて技術の改良をしました。一方、江戸に会津物産会所まきえを設けたり、長崎で中国やオランダへ輸出して、積極的に販売し

ました。明治になってからさらに技術を改良し、現在は、食器、花器、文具、茶器、仏具など、多くの種類の製品が作られています。会津漆器の歴史は、長い間の工夫が積み重ねられてきた手づくりの歴史だといえます。

2. 会津漆器の作りかた

材料は、木地きじとして、ブナ・トチ・クワ・ケヤキ・ホウ・キリなど会津産の木材が使用され、塗りは、天然漆うるし (国産・中国産) のほか、ベンガラなどの顔料がん、金銀箔粉はくが使用されます。製造は、木地作りきじ、下地付けしたじづけ、塗りぬ、加飾かしやくの工程に分かれます。

(1) 木地作り

木地は、丸物まるものと板物いたものに分けられます。丸物は、ろくろによって作られた椀、茶たぐのようなものです。板物は、重箱じゅうばこ、すずり箱などの箱型のようなものです。丸物を作る人を木地師きじしと言い、板物を作る惣輪師そうわしと区別して呼んでいます。丸物は荒型あらかた (だいたいの形を作ること) で人工乾燥



木地作り (丸物)

をし、水分を全くなくして、自然の状態かんそうで2、3週間おいてからろくろ作業に入ります。板物木地は、ホウの木ほうの木のうすい板で箱型を作り、四角は、鋸のこぎりで引き目を入れて曲げる挽き曲げひきまや、お湯に入れて曲げる湯曲げゆまなどで丸くします。